

寺社に見る浄土の表現

～浄瑠璃寺 宇治上神社 平等院～

Representation of Paradise,that can be seen in temples and shrines

～Joruriji,Ujigamijinnja,and Byodoin in Kyoto～

2020/8/26 谷守 正康

目次

はじめに

浄瑠璃寺

宇治上神社

平等院

まとめ

資料

浄瑠璃寺

- ・パンフレット：『真言律宗 小田原山 浄瑠璃寺（九体寺）』
- ・POST CARD：SERIES JORURIJI TEMPLE(Phptographed by Atsushi Naka)
- ・写真：「20200215 浄瑠璃寺」（谷守 正康）

宇治上神社

- ・チラシ：伊勢神宮
- ・写真：「20200215 宇治上神社」（谷守 正康）

平等院

- ・カタログ：『平等院 雲中供養菩薩 Byodoin Bosatsu on Clouds』（解説/岩佐光晴 平等院 平成 27 年 12 月第 5 刷）
- ・カタログ：『平安色彩美への旅 ～よみがえる鳳凰堂の美～』（編集/神居文彰 平等院ミュージアム鳳凰館 2016 年 4 月 21 日第 3 刷改訂）
- ・20200215 平等院：パンフ 絵葉書
- ・写真：「20200215 平等院」（谷守 正康）

表現 representation

浄土【仏教】 the Pure Land; Paradise ⇒ごくらく

見る I see some people in the garden.

寺社 temples and shrines

始めに

これは、公益社団法人 兵庫県建築士会・女性委員会「建築見学会—宇治・平等院と浄瑠璃寺を巡る」(2020年2月15日)に参加した記録である。

平等院は、当方の研究テーマ「浮遊感」に関する建物なので、見学した者である。

浄瑠璃寺

住職のお話しは、下記の通りであった。

この寺院に居ると、対（つい）、と言う事を良く感じる。例えば、東は出生を意味し、西は終わる事を意味する。

浄土についてのお経（*）では、人には9段の種別がある。

お寺は極楽を表現している。

池面に阿弥陀の顔が映る。

屋根は、元は檜皮（ひわだ）葺であった。

千体の仏は、無限を表わし、全てが救われる、と言う事である。

印相には、左手と右手に3種あり、 $3 \times 3 = 9$ 種の組合せがある。

三尊は、慈悲、知恵、力を表わす。

阿弥陀が伏目であるのは、“下方から拝む時の視線”に合う為である。

パンフレット：『真言律宗 小田原山 浄瑠璃寺（九体寺）』には、「塔前の石灯籠」、「馬頭観音像」の写真が載っている。

石灯籠の屋根を見ると、隅棟の軒先がワラビ手（丸く渦を巻く形）と成っている。

POST CARDの「馬頭観世音菩薩像頭部」を見ると、おデコに第3の目があり、人知を超えた能力を持っている事が分かる。

「四天王立像の内 持国天」は、背に火炎を漲らせており、その力を示している。

「秘仏・薬師如来像」は、天上人であり宙に浮かんでいる。背に、炎を制した光背を控えている。天蓋は、組み上げ格天井であり、天界を示し、天界を制する事を表わしている。

「吉祥天女像と厨子」の厨子の背後に、千体仏が見える。

* 平等院の資料「20200215 平等院：パンフ 絵葉書」の中の『観無量寿経』が説く九品の来迎」参照。

写真：「20200215 浄瑠璃寺」（谷守 正康）の写真 22（8頁）により、此岸である三重塔側から、彼岸である九体（くたい）阿弥陀如来のおわす本堂を見る。生命の源泉である苑池に、生命の果実の種（さね）の形をした小島が突出し、更に苑池の中央に、弁天であり、同様にさねの形をした中島が見える。

写真 25（9頁）により、聖なる空域に存する三重塔への階段が見える。

三重塔により、法悦に至った者は、屋根の相輪の先端の宝珠から解き放たれ、彼岸へと至る事が出来る。この時、人の種別の 9 段の最下層である下本（げほん）の下生（げしょう）の者でも、九体（くたい）阿弥陀如来の 1 者が、来迎（らいごう）して下さる。誠に、怒りでは無く、愛によって世界を制す教主・阿弥陀如来の神髓が、浄瑠璃寺に表現されている。

愛によって世界を統（す）べる阿弥陀如来の絶大な力は、本堂の浮いた階段（写真 15）、天界からの力が屋根に降臨し、隅棟に流れ、軒先の反りの勢いによって再び天空へと向かう様（写真 12）と、阿弥陀如来が空中に浮き、火炎を制し、天界を制する姿によって、表徴されている。

正しく、浄瑠璃寺の表象する極楽浄土は、愛と力に満ち溢れた世界である。

宇治上神社

写真 29 (10 頁) に見る軒の納めは、棟が 1 つで済む所、2 つの棟とした事により、2 つの反りを持った納まりとされている。

これは、この社殿が、天界からの降臨する力が強大であり、1 つの棟だけの反りによる天空への転射では済まない、と言う、力の大きさの表現であろう。

鳥居が、写真 10、写真 50 に見るように、額を掛ける束が造作されている。所が、伊勢神宮・神宮司庁「宇治橋」の写真 (*) を見ると、額束の造作がされていない。その代わり、額束の箇所には、日輪が輝いている。

額束は、日輪を表徴している、と言える、

*伊勢神宮・神宮司庁「宇治橋」の写真：資料「宇治上神社 チラシ：伊勢神宮」参照。

平等院

・カタログ：『平等院 雲中供養菩薩 Byodoin Bosatsu on Clouds』（解説・岩佐光晴 平等院 平成 27 年 12 月第 5 刷）には、様々な菩薩が雲に乗り、人を浄土へ来迎する歓びを表現している姿が見られる。

（1 頁・南 17 号）

花を捧げる菩薩。

雲は、花弁状の文様が踊るように重層され、芯が突出し、雲の襞が震え、迎える者の昂揚感が迫ってくる。

（2 頁・北 25 号）

蓮の花を、両手の間に浮かせる菩薩。

雲の花弁紋は最早無く、房状と成って何層にも開き、渦巻いている。

（9 頁・南 23 号）

楽器を奏でる菩薩。

（12 頁・南 21 号）

笙（しょう）を吹こう、とする菩薩。

雲は、小刻みに震え、渦を巻く花弁紋の芯も小刻みに突出せん、としている。

（17 頁・北 7 号）

両手を合わせ、慈悲を表わす菩薩。

雲は、渦を巻き、空中を浮遊する。雲先の渦巻き紋の花弁の芯が突出し、慈しみの昂揚が見れる。

（18 頁・北 10 号）

果実（さね）を持ち、法悦の昂揚を舞踊する菩薩。

雲も、前の渦の花芯は大きく突出し、或いは、下側の渦の花芯は大きく吸引し、躍動している。

（22 頁・南 22 号）

バチを両手に持ち、ダイナミックなリズムを打つ菩薩。

鼓の雲は、花芯が大きく正に突出し、菩薩が乗る雲は、2 つに割れ、優雅にたなびく雲の形状を最早とどめないで乱れ飛んでいる。

(24 頁・南 10 号)

印を結び、信心による法悦 *ecstasy* の菩薩。
雲も *Ecstasy* に呼応し、花卉が律動している。

(25 頁・南 5 号)

鉦を打つ菩薩。
おだやかな菩薩に合わせて、雲は楚々とした渦巻き状の花弁紋を、可憐に巻き散らしながら空中に棚引いている。

(26 頁・北 18 号)

鼓を打つ菩薩。
雲も小鼓のリズムに合わせて、真ん中の渦を中心に、左方へリズムの力が流れている。

(30 頁・北 6 号)

のぼりを持つ菩薩。来迎を表徴する菩薩であり、額の上には髪飾りの冠を付ける。
雲も、複雑な様相を成す。

(33 頁・北 26 号)

力強くリズムカルに太鼓を打つ菩薩。
雲は、菩薩の乗る雲も、太鼓の雲も、軽快なリズムに合わせて、華やいでいる。

(38 頁・北 1 号)

箏を可憐に爪弾く菩薩。
可憐な演奏ではあるが、内に秘められた激しい心情を受け、雲はダイナミックな様相を示している。

(46 頁・南 8 号)

横笛を吹く菩薩。
雲も、小刻みに渦を巻く。

(47 頁・南 14 号)

小鼓を打つ菩薩。

雲は、リズムに合わせ、口を開き、あるいは花卉の芯を固くして突出させている。

(48 頁上・南 11 号)

縦笛を吹く菩薩。

雲が、笛の音に呼応して、重層を成す。

(51 頁上・南 19 号)

ハープを弾く菩薩。

ハープの音色が流れ出て、菩薩の衣紋を伝わり、雲へと流れ、雲の渦が大きく、或いは引き、或いは押し出され、音楽の力を表わしている。

(51 頁下・南 26 号)

シンバルを打つ菩薩。

シンバルの小気味よさに、雲が多層を成して長く尾を引いている。

菩薩は、鼓を打ち、音楽を奏で、祈り、舞って、法悦に至り、永遠への命の営みへと、鼓舞している。音楽、舞い、祈りによって、永遠への力が満ち満ちた菩薩達である。菩薩達は、人々を、力強く鼓舞し、勇気付けている。

・カタログ：『平安色彩美への旅 ～よみがえる鳳凰堂の美～』（編集/神居文彰 平等院ミュージアム鳳凰館 2016年4月21日第3刷改訂）によって、CGによる創建時の姿を見る事が出来る。

2頁 西窓からの日光が、堂内の溢れる色彩に反射し、堂内は光に満ち溢れていた。（その後、西窓が閉鎖されたが、紫外線による劣化防止の為であったのかも知れない。）

阿弥陀如来は、宙に浮かんでいる。背に火炎を制し、天蓋には日輪を従えている。阿弥陀如来は、火、光を制し、浮遊する、全ての力の権化である。

4・5頁 鳳凰堂は、天界に浮かぶ宮殿である。両翼の廊は、天界の地面から浮かんでいる。屋根は、上方からの力の流露を、降り棟、隅棟の反りによって再び天空へと返し、力のみなぎった空間を見る事が出来る。

8・9頁 御開帳成った鳳凰堂。池面に阿弥陀如来のお顔が反映し、不死鳥の鳳凰のつがいと相まって、永遠へ至る姿、永遠の命が約束された天界である。両翼廊も、黄金の露盤と、空中に持ち上げられて浮いている形象により、その昂揚感を打ち震わせて伝えている。

10頁 尾廊、と言う、表では無い裏側の陰の部分の存在によって、天界の奥深さが増している。

33頁 天蓋は、宇宙の深遠までを、阿弥陀如来は制する事を示し、人々に勇気を与える象徴である。

43頁 音楽を奏で、舞い、人々を鼓舞し、勇気付け、阿弥陀如来の永遠を体現する菩薩達である。

まとめ

浄瑠璃寺の伽藍は、此岸から彼岸へと連なる事によって、終わりの無い世界を表徴している。細部においても、聖域が浮かび、永遠の為の営みが表徴され、この世の永遠である事の願いの密旨が込められている。

上賀茂神社の聖域は、奥の上方成る空域が天界を示し、天界である空からの力の降臨が屋根面へ降り来て、屋根の軒先の先端において、再び天空へと延びる為に勢いよく反り、その勢いは屋根の4隅において2つの放射と成って表現されている。

鳥居の両柱の中心に在る額、額に代わる要は、日輪を象徴する物である。

平等院鳳凰堂は、『平安色彩美への旅 ～よみがえる鳳凰堂の美～』10頁「尾廊を含む上空からのテクスチャ」のイメージの通り、中央に核心のお堂が置かれ、両側に両翼の廊が浮かび、後ろには奥行きとしての尾廊が配置され、天界の昂揚が沸き上がっている。

細部においても、阿弥陀如来、菩薩が永遠の天界の者として空中に浮かび、屋根の鳳凰が不死を表徴し、阿弥陀如来の天蓋が、宇宙を制している事を表徴している。

永遠の力を制する事が、音楽、踊り、光、火、金色、白色による祈りの法悦によって、自在に表現されている。

以上、永遠を象徴する造形によって、永遠の存続を感取出来る表象が成されている。

特に、浄瑠璃寺の住職の「三尊は、慈悲、知恵、力を表わす。」というお話は、永遠の存続を表象する一文である。